

目次

- 1, 構造的背景とは？
- 2, 構造的背景の重要性
- 3, 構造-機能主義とは？
- 4, 構築主義とは？
- 5, 政策に対する構造的アプローチ

1, 構造的背景とは？

構造的背景とは、社会全体におけるアクター同士及び社会的潮流の関係性を指す。ここにおけるアクターとは、意思をもち目的を達成するために行動する集団・組織を指す。各アクターはそれぞれの合理性に基づいて、目的達成のために動く。一つの社会事象にはさまざまな合理性を以て動くアクターが多数絡み合い、彼らの相互作用の下、国家の政策は打たれる。社会的潮流とは、社会全体に対して大きな変革を与える時代的傾向を指す。これらが社会問題における要素とそれらに作用する力となる。構造的に事象を読み解くということは、このように事象を、それらを構成する要素に分解し、それらの要素が果たす機能と関係性をシステムティックに捉えることを指す。そして、一つの問題分野に関して、それらの原因そのものまたは解決策を講じるのは必ずその事象に関わるアクターである。しかし、アクターの存在及び関係のみでは、社会における構造は変化することがない。それらの関係に対して外部から作用する抗えない力（社会潮流）の存在によって初めて、内部のアクター間の関係は変化するのである。よって、ここでは各アクター間の関係性に加えて、それらのアクターではどうしようもない抗えない力としての社会潮流の存在を整理、読み解く力が求められる。社会潮流という外部からの力を受けた結果、合理的に動いてきたアクターがどのようにその動き方を変え、対応していったのか。それを現在の政府の方針や政策から読み解くことで、自らの打つ政策の妥当性が高まるのである。

2, 構造的背景の重要性

ここにおける構造とは、各問題意識の政策分野に潜むパターンとしての形成様式のことである。政策とは、それぞれの社会問題に関してその解決を目指し、施されるものであるが、そこにおける具体的な政策は多くの要素から決定される。そして、一つ一つの政策を個別具体的な理由によって施行されたものとしてとらえるのではなく、その政策分野における要

素を整理し、それらを動的にとらえることは社会事象解決における最適解の理解及び政策提言に必要不可欠である。とある社会事象に対して、解決策を講じる場合、まずその社会事象にまつわる多くの学問分野における経験と累積が必要である。しかし、これらの伝統的な学問領域だけでは、問題解決には至らない。政策形成に必要なのは、それらの多面的な問題に対してそれぞれの分野の解決策から、採用すべき最適な判断の組み合わせを選び取ることである。我々はそれぞれの問題意識に対して政策提言をする以上、専門的な知識だけではなく、その状況を的確に踏まえた答えを「整理」し「組み合わせる」力が求められるのだ。そこにおいて、各雄弁会員が自らの問題意識に関する政策分野において、現在の政府の方針がどのような変遷・理由を経て、行われているのかを理解するのにそれぞれの背景の構造的なとらえ方は重要となる。

3. 構造-機能主義とは？

構造的に国家の行っている政策の背景を読み解くことは、構造-機能主義的観点に基づいたものである。以下では、構造-機能主義をそれらの代表格であるパーソンズとマートンを筆頭に読み解いていく。

構造-機能主義とは、社会システムにおける構造形成および構造変動の生起の方向性を、当該社会システムにとっての機能的要件をよりよく充足するような方向性として説明しようとする、社会構造およびその変動についての社会学的分析の基本的方針を意味している。この構造-機能主義はパーソンズが 1900 年代前半にパターン変数や AGIL 図式を発表してから、一気に広まった考えである。パーソンズは社会学の分野において、社会一般に渡る一般理論の構築を目指した。まずパーソンズは行為を行為システムと捉えるところから、出発している。そしてその行為システムのサブシステムとして、文化システム、パーソナリティシステム、社会システムなどを挙げている。この中でも特に社会システムについて、有名な構造機能分析および AGIL 図式などの、独特な理論 (=社会システム理論) を唱えたことで、彼は構造-機能主義の旗手として存在し続けた。

彼は家族や経済などの様々な社会事象に対して、構造機能分析を行った。これは 1 章で書いた、構造理解に殆ど等しいものである。

構造機能分析は社会システムを構造と機能に分けて分析したものである。構造にあたるのは、社会システムの中でも変化に乏しい安定的な部分である。構造は定数部分であると定義される (1 章におけるアクターの本来の関係性がこれにあたる)。そして機能とは、その構造の安定に寄与する部分であり、社会システムの中で変化が見られる部分である。機能は変数部分であると定義される。この機能を促すものとして、「構造的背景の重視」は社会潮流を設定した。そして、パーソンズはこの構造と機能の分析により、社会一般を分析できるとした。

彼の理論を代表する AGIL 理論は構造機能分析よりも、より具体的に社会を分析する必要から生まれたものである。A は適応(adaptation)、G は目標達成(goal attainment)、I は統

合(integration)、Lは潜在的パターンの維持・緊張処理(latent pattern maintenance and tension management)である。社会システムは、これらの機能(位相運動)によって維持されるとされるとしたのだ。

パーソンズと同じく構造-機能主義を推し進めた人物としてもう一人、マートンを挙げておく。マートンの機能分析では、その結果が望ましいものである順機能とそうでない逆機能、その結果が知られている顕在的機能とそうでない潜在的機能の区別が提唱された。たとえば、その結果が知られておらず望ましくない働きをあらわす場合、彼はその働きを潜在的逆機能といった。彼の機能分析のねらいは、「意図せざる結果」を明らかにするとともに、従来の機能主義理論のうちに認められた保守性とイデオロギー性とをともに克服することにある。

～マートンによる機能の定義～

□主観的意向(動機、目的)の諸概念

機能という言葉が主観的なものと混同されやすいので注意しなければならない。

□客観的結果(機能、逆機能)の諸概念

混乱① 社会(文化)システムへの積極的貢献に限定する傾向

混乱② 動機という主観的なカテゴリーと機能という客観的なカテゴリーとの混同

機能[function]とは一定の体系の適応ないし調整を促す観察結果であり、逆機能[dysfunction]とは、この体系の適応ないし調整を減ずる観察結果である。これらは、どのような場合であれ、項目は機能的結果と逆機能的結果とをともにもつので、総結果の正味の差引勘定を秤量する基準を引き出さねばならない困難かつ重要な問題が生ずる。ここにおいて、顕在的機能[manifest function]とは、一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果であって、しかもこの体系の参与者によって意図され認知されたものである。これと相関連して、潜在的機能[latent function]とは、意図されず、認知されないものである。

マートンは、「潜在的機能の発見は、社会学的知識を大いに増進させる」と述べている。さらに言うなら、マートンにとって潜在的逆機能を発見するのが社会学者の仕事なのだ。

以下はマートンが、彼の機能分析の例としてあげた事例である。

【事例1：ホピ族の雨乞いの儀式:58-60】

未開民族の迷信的な慣行として片付けられ、それだけで問題が解決されたと考えられている。しかし潜在的機能という概念があれば、この儀式は各地に散在する集団の成員が集合して共同活動に参加する定期的な機会であり、集団的同一性(集団のまとまり)を強化する潜在的機能を果たしているといえるのだ。

※雨乞いの儀式については、科学批判の文脈でもよく使われる。

【事例2：政治的ボス組織】

アメリカ人の大部分にとって政治的ボス組織は、文句なしに「悪く」「望ましくない」。例えば、人選にあたってインパーソナル（非人格的）な資格に基づかなければならないのに、政党への忠誠心などに基づいているからといった理由があげられる。世の中から一掃しようと思えばできるこの組織が存続し続けるのはなぜだろうかと考えることができる。これも公的には非難さるべき組織が、現在の諸条件のもとでは、基本的な潜在的機能を充足しているからである。

政治的ボスの中心的な機能は、当時の政治組織の全体に分散している「権力の断片」を円滑に作用するように組織し、集中化し、維持することである。公的には権力が分散しているが、権力の分散は、実際の決定や活動という点からすると困難さをもたらす（構造的脈絡）。様々な下位集団に対して、政治的ボス組織は機能する。第一に、地方共同体や近隣社会に対して、援助をもたらす。第二に、企業集団に対して、経済利得（公共事業など）をもたらす。第三に、普通の個人的な出世街道から外れた人たちに対して、社会移動（要するに出世）をもたらす。このような機能から政治的ボス組織に対する、ニーズを読みとくことができるのだ。

4. 構築主義とは？

3章であげた構造-機能主義に対して、社会構築主義といった考えかたがある。本章では、その構築主義に関する記述を行う。ここで重要なのは、構造的に機能的によみとくことが絶対的な方法論ではないということ把握してもらうことである。構造的に社会問題を読み解くことは、2章でも述べたように、事象を整理し、組み立てるには効果的であるが、それだけが社会事象に対するアプローチ法ではない。本章はそのような、方法論が絶対的なものではないと認識していただく、参考として記載する。

（社会）構築主義とは、一つの社会問題について、その問題性を学者が決めるのではなく、なにが問題であるかから個人に立脚し、実際に生じた言説のみを用い、接近する経験主義的方法論を指す。これは、個人や集団がみずからの認知する現実の構築にどのように関与しているかを、実際に発せられ書かれた言説を中心に明らかにするものである。このため、さまざまな社会現象が、人々によってどのように創造され、制度化され、慣習化していくかが問われ、社会的に構築された現実とは、絶え間なく変化していく動的な過程として捉えられる。社会構築主義においては、ある一つの事象を社会問題として人々が解釈し、認識するにつれて、現実そのものが再生産されるのである。

社会構築主義においては、実際に人びとが発した言説から社会を読み解く。ここにおける社会問題はそれがマスメディアで報道されようが、されまいがあらかじめ事実として存在するという実体論的な事実認識ではない。ある事象が社会に対して告発され、受け入れられたときに、それは事実となるという認識に基づくのだ。つまり、事実を告発するマスメディ

アはその事実を報道しているのではなく、報道することによって事実を作り出しているのだ。社会構築主義は「言葉が現実を作る。」という、記号論的言語観にもとづいている。言葉が与えることで初めて世界は分節化され意味を持つのであり、絶えず変化し続ける私たちの身体動作は、「歩く」や「走る」「笑う」などの言葉が与えられ、分節化されることで、初めて観察可能となる。社会問題の構築主義を取り入れたキッセとスペクターは、社会問題の構築主義を次のように提唱している。

われわれは、社会問題を定義するにあたって、社会のメンバーが、ある想定された状態を社会問題と定義する過程に焦点を合わせる。したがって、社会問題は、なんらかの想定された状態を社会問題と定義する過程に焦点を合わせる。したがって、社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動であると定義される。(中略) 社会問題の理論の中心課題は、クレーム申し立て活動とそれに反応する活動の発生や性質、持続について説明することである。

以上のように、実体論が、問題になる状態があらかじめ存在するから社会問題になるという認識論的立場をとるのに対し、構築主義は「問題である」という定義が社会問題を作るという認識論的立場をとる。

5. 政策に対する構造的アプローチ

以上、構造-機能主義、及びそれに対する構築主義を踏まえた上で、実際に社会事象に関する政策に対して、どのようにして構造的背景を理解しているかを記載する。構造的背景の理解には、次の四つのステップを必要とする。まず、その政策・方針に関わる内部アクターを列挙して頂く。実際に政策に関わるアクターをすべて列挙しようとする場合、その数は無数になるため、実際に挙げていただくのは中心的なアクター2 つから 4 つほどになるだろう。そして、次にそれらが現在の政策・方針とは関わりなく、本来有している目的を提示していただく。これにより、そのアクターが外部潮流の影響を受けなかった場合、本来どのように動いていたかを把握していただく。このステップはとても重要で、現在会員が志向している政策が実は、あるアクターが合理的に動いていたら、帰結していた政策だったということもあり得る。その時、なぜそれが現在行われていないかを構造的に理解することで、現在の状況を乗り越える政策提言を行うことができるのだ。次に、それら複数想定される内部アクターの相互作用が、なぜ現在のような政策を行う方へ進んだのか、それらを動かした外部潮流を把握していただく。この外部潮流は、会員が政策を提示する際に、避けて通れないものである。合理的に考えれば、効果、費用とも十分に優れた政策であっても、この外部潮流の影響により、想定通りに行われない場合は多々ある。自らの問題意識に関わるであろう、社会潮流の「力」を理解することで、政策がどのように帰結するかを把握できるようになるのだ。そして、これらの社会事象における要素と力を把握していただいた上で、会員の問題

意識に関わる政策がどのようにして、なんのためにおこなわれたものであるか、その変遷を理解していただきたい。ここで重要なのは外部潮流によって、大きく変更された政策方針においてもアクターの合理性は働いているということである。これらのステップを踏むことにより、政策における構造的背景の重視とさせていただきたい。

構造的背景理解へのステップ

- ① 内部アクターの列挙
- ② 内部アクターの本来有している合理性・目的
- ③ 外部潮流（又は潮流を生んだ外部契機）
- ④ 内部アクターの関係性が外部潮流にどう変わったのか。

以上